

一般社団法人日本病理学会 令和8/9年度 各種委員会・支部活動活動報告

拡大常任理事会担当者	委員会名	委員長 (兼任指定職)	令和8/9年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
小田	理事会	小田 義直	・近年顕在化している専攻医登録数の減少傾向について、その要因を徹底的に分析し(企画委員会)、実効性ある具体的対策を速やかに立案・実行する。 ・広報委員会、病理医・研究医の育成とリクルート委員会、社会への情報発信委員会が一体となり、医学生・研修医に対して戦略的かつ魅力ある情報発信を展開し、将来を担う人材の確保に全力で取り組む。 ・病理解剖数の減少という喫緊の課題に対し、内科学会、医療安全調査機構および関連団体と積極的に協議を重ね、実効性のある打開策を構築・推進する。
	拡大常任理事会	小田 義直	・学術委員会および企画委員会 under 40 を中核とし、若手病理医が挑戦し活躍できる研究基盤を強化し、本学会の学術的プレゼンスを一層高める。 ・ゲノム病理診断の保険収載実現に向け、R10年度診療報酬改訂を見据えた戦略的かつ継続的な活動を主導する。 ・英国、ドイツ、ヨーロッパ病理学会との国際学術交流をさらに深化させ、わが国の病理学の存在感を世界に示す。
	選挙管理委員会	—	
田中	倫理委員会	藤井 誠志	医療や研究が進むに応じて、病理医が取り扱う病理標本の生体試料としての重要度が高まっている。新たな問題に対しても患者を含む皆様の理解が得られる方向性を示せるように、病理学会員と問題と情報を共有し、法令を遵守して生命倫理を重視する倫理委員会の役割を担っていく。
	COI委員会	大森 泰文	各種ガイダンス策定に係るWG委員のCOIを日本医学会の「診療ガイドライン策定参加資格基準ガイドライン」にしたがって粛々と精査する。各学会とも、提出されたCOI申告書の管理に苦慮している現状があり、電子化に移行する学会も少数ながら見られる。また、日本医学会での集中管理も検討されている。病理学会COI委員会としても、安全性を保ちながら電子化が可能かどうか、検討を始めたい。
伊藤	学術評議員資格審査委員会	伊藤 智雄	例年通り、厳正に審査を進めたいが、研究期間不足などでの申請が例年みられ、より一層の周知を図りたい。
田中	功労会員・名誉会員資格審査委員会	久岡 正典	学会の定める規定(内規)に基づき、功労会員及び名誉会員の有資格者の中から適格な候補者を選出する。
森井	企画委員会	森井 英一	学会の発展に資する総務的な種々の事項を立案・検討する。学会の将来構想、機構改革、その他の委員会に属さない重要事項につき検討する。会員、専攻医増加のための対策を検討し、若手病理医のリクルートを活性化させる。さらに若手病理医の研究活動の活性化を目指しUnder 40 WGを進める。個人情報に関するガイドラインの策定なども進める。
	DEI推進委員会	樋田 京子	ジェンダー、地域、職場、家庭環境など多様な背景を有する会員の多様性を尊重し、本会事業に自発的に参加しやすい環境整備と、誰もが活躍できる機会の創出を目指します。あわせて、DEI推進に関する課題の把握と対策に取り組み、前期に実施した病理医の働き方に関するアンケート結果の公開や、オンラインセミナー等の啓発活動を推進してまいります。
小田	登録衛生検査所等における「病理診断」に関する検討委員会	坂谷 貴司	登録衛生検査所等における病理診断に関わる諸問題を整理しつつ、保険医療機関間の連携病理診断が進む過程で生じた課題についての方策なども検討する。日本衛生検査所協会代表との意見交換を進める。
中黒	会員システム検討WG	中黒 匡人	2026年1月に新会員システムの移行は完了している。不具合を随時修正するとともに、新会員システムと受験申請システムや更新申請システムとの連携を進めていく。
	支部委員会	宮崎 龍彦	会員から最も身近な存在である支部として、診断業務および学術の交流の場を提供する体制を維持発展させる。7支部に置ける活動状況を情報共有し、支部運営における問題点を議論し、解決策を見いだす。前期の活動で明らかとなった支部ホームページの運営について、広報委員会と協力して問題点を克服する方策を見つけ出す。また、各支部での病理医のリクルートや会員の生涯教育に資する活動を引き続き支援する。
金井	財務委員会	金井 弥栄	慎重な予算立案と確実な執行により学会の財務状況を健全に保ち、財務基盤の安定性を維持する。将来構想に鑑み、学会の発展に必要なコンセンサスの得られた事業等について臨機応変に過不足ない執行を行う一方で、学会運営の長期的な持続可能性を堅守するように努める。
都築	国際交流委員会	都築 豊徳	現在行っている国際交流事業の安定継続を行う。更には国際的な人的なつながりを深くする努力を行う。
田中	学術委員会	田中 伸哉	1)学術委員会の重要な任務の1つは、各学会賞の決定である。日本病理学賞、診断病理学賞、学術研究賞、症例研究賞について各賞の意義を再確認しながら、円滑に選考を進め、受賞者および学会が更に発展するように役割を果たしたい。(2)総会、秋期特別総会のあり方も学会の学術活動のコアである。特に英語化、国際化については他学会の状況を踏まえながら病理学会としてのあるべき姿を議論していきたい。
都築	編集委員会	都築 豊徳	学会刊行物の編集・発信の安定した運営に努める。会員の診療、研究活動に役立つ情報を提供し、随時アップデートを行う。
	PI刊行委員会	牛久 哲男	雑誌の質を高め、投稿数、閲覧・引用数が増加するよう長期的に取り組むを行う。投稿・査読システムの安定化を図る。
	PI常任刊行委員会	牛久 哲男	雑誌の質を高め、投稿数、閲覧・引用数が増加するよう長期的に取り組むを行う。投稿・査読システムの安定化を図る。
	PI編集長・副編集長会議	牛久 哲男	雑誌の質を高め、投稿数、閲覧・引用数が増加するよう長期的に取り組むを行う。投稿・査読システムの安定化を図る。
	「診断病理」編集委員会	池田純一郎	2025年4月号からJ-stage掲載がスタートし、幅広い読者に読まれる雑誌になることが期待されることから、会員にとってより有意義な総説の企画、掲載を充実させると同時に、多くの方に投稿していただけるように努める。
	病理専門医部会会報編集委員会	倉田 盛人	専門医制度に関する最新情報を、日本病理学会の専門医・専攻医の皆様にも広く周知する。あわせて、合格体験記等の特集記事や各支部の学術活動報告を掲載し、内容の充実を図りたい。また、『診断病理』のオンライン化に合わせたコンテンツについても検討していきたい。
	剖検情報委員会	宇於崎 宏	日本病理剖検報第67,68号を刊行し、引き続き剖検情報の収集、剖検報データベースの活用を進めていく。疾病、傷害及び死因の統計分類に基づいて、ICD-11準拠コードの導入作業を行う。
	癌取扱い規約委員会	福嶋 敬宜	2026年度は、まずあらためて本委員会の結成主旨の共有と目標設定を行います。そして、日本病理学会の常任理事会の方針に従い、各規約へのUICC病期分類の併記、記号の統一、および国際的な潮流を踏まえた組織学的な治療効果判定の標準化を推進します。当学会が直接関与しない規約への対応力向上を図る一方で、各規約内容は各分野の独自性を尊重しつつ、出版社等との協議を通じて早期に書式統一化の指針を作成します。また、新規規約の適用開始時期の統一については、各学会の背景を尊重しつつ粘り強く協議を重ね、広報委員会とも連携して診療現場への効果的な周知方法を確立します。
	小児腫瘍組織分類小委員会	井上 健	代表的な希少がんであり、時に病理診断が難しい小児腫瘍について、症例検討会や教育講演を行うとともに、「希少がん診断のための病理医育成事業」とも協働しながら、新たな知見の普及に対応すべく活動を継続する。小児腫瘍のWHO分類に関して、病理診断に際して必要な知識の普及をはかり、小児病理医の育成に注力していきたい。
	日本病理学会領域横断的がん取扱い規約検討WG	渡邊 麗子	UICC第9版と連動した新・第二版領域横断的がん取扱い規約の作成・出版にむけて、委員一丸となって取り組む。
伊藤	病理診療ガイドランス委員会	伊藤 智雄	各種ガイダンスの迅速な策定や周知に鋭意努めていきたい。
	病理診断支援AIの手引き策定WG	吉澤 明彦	医療機器化された病理診断支援AIはまだないが、生成AIを中心としたAIは日常のものとなっており、その利用におけるリテラシー教育が必須である。本委員会ではこの点を念頭に、「病理診断支援AIの手引き」の改定作業をすすめ、2026年上半期の発表を目指す。以降も、適切なAI利用のためのコンテンツ策定などを計画する。
金井	ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程策定WG	畑中 豊	まもなく発出予定の「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程 第2版」および「がん全ゲノム解析等のための検体取扱いガイダンス 第1版(確定版)」の普及・定着に注力する。内容の充実を図るとともに、当学会員および関係学会への迅速な情報共有に努める。
伊藤	固形癌HER2病理診断ガイダンス策定WG	畑中 豊	「固形癌HER2病理診断ガイダンス 第3版」に関わる新たな診断薬等が臨床導入された際は、適宜ガイダンスを更新するとともに、学会員への速やかな情報伝達に努める。
佐々木	子宮頸部上皮内腫瘍p16免疫染色ガイダンス策定WG	三上 芳喜	本学会、日本産科婦人科学会および日本婦人科腫瘍学会から参画いただいたWG委員により作成されたガイダンス草案について、内容のファクトチェックおよび掲載画像の精選を行うとともに、文言の最終調整を進め、正式なガイダンスとして発出する予定である。
伊藤	用語委員会	伊藤 智雄	ICD-11の翻訳確認作業などが主たるミッションであるが、諸機関と一層の連携を深め、正確な翻訳に努めていきたい。

一般社団法人日本病理学会 令和8/9年度 各種委員会・支部活動活動報告

拡大常任理事会担当者	委員会名	委員長 (兼任指定職)	令和8/9年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
田中	研究推進委員会	増本 純也	最近「臨床医学」としての「診断病理学」への期待が高まっている。一方で、分子生物学、生化学、遺伝学、免疫学、AIなどの情報技術は「基礎医学」的な内容を多く含むため、これらの情報への病理学会会員のアクセスは重要な課題です。このような病理学会会員のニーズに応えるべく、病理学会カンファレンスで先端研究や先端技術を紹介し、ひいては、会員のみならず、医学部学生にもリサーチマインドに溢れた「病理学」の魅力を伝えたいと思います。
都築	研究委員会	都築 豊徳	研究委員会が掌握する日本病理学会として取り組む研究事業に関して適切な運営が行われているかどうかを管理・指導する。個人情報や匿名加工情報の取り扱いを更に推進する。JP-AID DB推進事業の今後の運営方法を検討する。SCRUM Japanとの共同研究を推進する。
中黒	JP-AID DB推進事業WG	倉田 盛人	Japan Pathology Artificial Intelligence Diagnostics Project (JP-AID)の後継事業として、デジタル画像を収録した「日本病理学会デジタル画像データベース」の維持・管理を行ってきたが、2025年度をもって5年間の区切りを迎えるため、研究としての活動は終了する。ただし、匿名化された本データベースについては本研究の成果物として維持することとし、引き続き日本病理学会会員が無料で検索・閲覧できるほか、希望に応じてデジタル画像をダウンロードし、AI研究等に利用できるシステムを継続して運用する。
佐々木	希少がん病理診断支援検討委員会	佐々木 毅	希少がん事業は、9年目を迎える。いわゆる症例が少ない臓器から、乳腺、婦人科、呼吸器、消化器、泌尿器領域などメジャーな臓器における希少サブタイプを包含する形へと発展させ、講習会等を開催しているが、次年度は従来までの消化器を消化管と肝胆膵に分け、合計12分野で6回の希少がん病理診断講習会と若手リクルートのためのエキスパート育成講習会を計画している。またWSIを用いたe-ラーニングも2,100症例を超えており、さらに内容を充実させる予定である。
金井	ゲノム研究用病理組織検体取り扱い規程策定委員会	金井 弥栄	ゲノム病理標準化講習会受講者等から要請のあった解析項目を中心に、追加実証解析データを取得し、『ゲノム研究用病理組織検体取り扱い規程』の改訂を継続する。学会内外に向け、pdf版を全文無償でダウンロードできる形で発出し、ゲノム病理標準化講習会のテキストとしても使用することで、周知を図る。研究用規程の周知を通して、会員に対して分子病理学解析にかかる基本情報を提供するとともに、学会外に向けて研究基盤構築における病理学のプレゼンスを示す。
田中	SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN事業検討WG	谷田部 恭	3月までに解析に向けたすべての準備が整い、解析を進めることが可能となった。R8年度ではパイロット研究を施行し、そこで得られた知見をもとにR9年度に広く病理学会員の公募を開始したい。
森井	病理専門医制度運営委員会	森井 英一	日本専門医機構と連携しながら、病理専門研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を実現する。さらに病理専門医数の向上を目指した制度設計を図る。
	病理専門医資格審査委員会	中黒 匡人	受験申請・更新申請とも電子化が完了しており、順調に運用されている。今年度は新会員システムと連携し、基本情報等のデータがそのまま移行し、申請できる形にする予定である。
	病理専門医試験委員会	柴原 純二	国民の期待に応える病理専門医を適切に評価する試験を実施する。医学の進歩や診療環境の変化を踏まえ、試験内容の妥当性を検証し、必要に応じて出題形式の見直しを検討する。
	病理専門医試験実施委員会	非公開	
	病理学会認定施設審査委員会	坂谷 貴司	病理診断を行う医療機関を対象にした新たな施設認定制度が2027(令和9)年4月から開始する。それに向けて2026年秋に申請を受け付け、審査を行う予定である。新制度への移行をスムーズに行えるよう万全を期して臨む所存である。
	病理専門研修プログラム管理委員会	池田純一郎	プログラムの改定について、各プログラム責任者に適切に情報を伝え、スムーズに審査を進める。特に今後プログラムと連動した新施設認定の認定が予定されているため、関係する委員会と連携を取り周知していく。また、全国的な剖検数の低下に対しても、できるだけ病理専攻医の定員が下がらず、志望者の減少が起きないように対応する。
佐々木	分子病理専門医制度運営委員会	佐々木 毅	次年度で、第7回を迎える分子病理専門医試験に関して、これまでの分子病理専門医試験の内容等を再度顧みて、研修カリキュラム等の再検討を計画している。これまでに約900名の分子病理専門医を認定しているが、分子病理専門医のゲノム医療へのかかわり方、変わりつつエキスパートパネルへの対応などに関して、検討を進めていく予定である。
	分子病理専門医研修委員会	西原 広史	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行う。また検査制度の変更に伴って、必要な改訂を行う。分子病理診断講習会を企画し、病理診断を目的とした遺伝子検査の臨床実装に向けた教育啓蒙活動を開始する。今年度は、がんゲノム医療体制の変化に応じて、分子病理専門医の在り方に関する提言をまとめる。
	分子病理専門医資格審査委員会	里見 介史	分子病理専門医制度が診療現場で実効性を持つ資格として一層機能するよう、分子病理制度運営委員会と連携して審査基準の明確化や透明化を進めるほか、分子病理専門医研修委員会と実務に即した講習会の充実を図り、分子診断の質保証に貢献したい。
	分子病理専門医試験委員会	畑中佳奈子	日々更新されるゲノム医療に対応でき、ゲノム病理学的な知識に関するリテラシーの向上につながる分子病理専門医を認める試験の構築を目指す。
	分子病理専門医試験実施委員会	非公開	
森井	口腔病理専門医制度運営委員会	石丸 直澄	社会のニーズに適合した口腔病理専門医制度のアップデートを図り、口腔疾患における専門性の高い分野での病理学的な貢献ができるよう他の関連委員会と協力し合いながら本委員会を運営する予定である。また、次世代につながる口腔病理専門医の制度設計、生涯教育に向けた環境整備を心がける方針である。
	口腔病理専門医試験委員会	美島 健二	口腔病変の適正な診断能力を有する口腔病理専門医を選別すべく、専門医試験問題の出題範囲の決定や質の担保に尽力したい。また、口腔以外の病変についても幅広い知識を有することが、口腔病変の診断レベルの向上にも繋がるので、病理専門医委員会の先生方と密な連携をとり、口腔以外の病変における判断能力についても正しく評価ができるよう務めたい。
	口腔病理専門医試験実施委員会	非公開	
	口腔病理専門医資格審査委員会	菊池建太郎	口腔病理専門医試験の資格審査については、試験申請要綱にもとづいて適切な運用を実施したいと考えています。資格更新については、本年度が新基準による審査の移行期5年目(全面移行)に当たります。更新予定者を対象に、昨年同様、Web説明会を行い丁寧な運用に努めていきたいと考えています。
	口腔病理専門医制度基盤整備WG	矢田 直美	口腔病理学の発展および口腔病理診断業務の安定的提供を目的として、口腔病理専門医の継続的育成と社会的貢献の推進を図る。研修体制の在り方や歯科大学以外に所属する口腔病理医の在籍状況の把握を進め、関連機関との連携による認知度向上についてのWG案を作成し、口腔病理専門医制度運営委員会へ提案する。
佐々木	医療業務委員会	佐々木 毅	標本の保管期間に関して、これまで検討してきたが、倫理委員会とも連携して次年度中に保管期間の推奨案をまとめ公開を目指す予定である。また、「すべての病理診断(医行為)は医療機関で」を掲げて活動してきたが、これまで以上に力を入れ取り組む計画である。
中黒	コンサルテーション委員会	久岡 正典	日本病理学会・国立がん研究センター病理診断コンサルテーションシステムの運営と管理を円滑かつ適正に行い、会員の日常の病理診断を支援すると共に、わが国の医療の質向上と均てん化に貢献する。
	社会保険委員会	中黒 匡人	令和8年度診療報酬改定での積み残し課題に関して、令和10年診療報酬改定での要望等について検討を行う。
	精度管理委員会	内藤 嘉紀	病理分野においては、病理診断と標本作製が両輪となって精度管理を推進していく必要があります。当委員会では、NPO法人日本病理精度保証機構や関連学会と連携しながら、日常業務に役立つ実践的な精度管理のあり方を提案していきたいと考えております。
	剖検・病理技術委員会	中黒 匡人	剖検数の減少傾向が続いている中で、一定の剖検診断レベルが維持できるよう引き続き講習会の充実等に努める。
金井	ゲノム病理診断検討委員会	金井 弥栄	厚生労働省におけるがんゲノム医療中核拠点病院等の指定要件に関する議論や、国際標準化機構(ISO)の分子病理学的解析にかかる文書の策定状況等の最新情報を収集して吟味し、日本病理学会から発信するべき事項があれば当該機関に適切に申し入れ等を行う。ゲノム情報を加味した形態診断である“ゲノム病理診断”のあるべき方向性について、継続的に討議する。
田中	診療関連死調査に関する委員会	田中 伸哉	現在の医療事故調査制度が始まって2025年で10年となり日本医療安全調査機構からまとめが発表されており、病理解剖の果たす役割は大きいものの、医療事故事例における病理解剖率は30%後半と低下している。医療事故事例における病理解剖率を増加させる方策を日本医療安全調査機構と模索していきたい。この事を日本病理学会が、日本内科学会と協働して実施している全国の病理解剖数の増加策に貢献するものにしていきたい。
佐々木	デジタルパソロジー・医療情報委員会	吉澤 明彦	AIを含むデジタルパソロジーの導入を検討あるいは導入した施設が増えてきている。会員における適切な利用を促すための、1)e-learningコンテンツの作成、2)専門医試験出題の準備、を進める。また、2024年に改定された各手引きの2029年改定のスケジュールを行う。
中黒	病理診断・臨床検査あり方検討委員会	鶴山 竜昭	臨床検査室に関する国際標準化機構(ISO)をはじめとする国際規格の策定に積極的に関わり、臨床検査における病理検査と診断の区別と行程、現在話題のAIによる判断評価やリスクマネジメントについての議論を学会員に情報を発信していく
伊藤	広報委員会	笹島ゆう子	(1) 広報活動: 社会への情報発信委員会と協同し、総会時の公開展示、阪神健康メッセへの参加等を通じて病理に関する情報の発信を継続する。 (2) 学会HPのリニューアル: HPリニューアルWGを中心に改修準備を進める。 (3) その他: 学術評議員更新対応、広報委員会・社会への情報発信委員会で作成した動画やHP内の画像についての転載許諾に関する審議、HPへの求人情報掲載依頼等に関する審議等を継続して行う

一般社団法人日本病理学会 令和8/9年度 各種委員会・支部活動活動報告

拡大常任理事会担当者	委員会名	委員長 (兼任指定職)	令和8/9年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
伊藤	社会への情報発信委員会	伊藤 智雄	現在、例年開催していたHANSHIN健康メッセの開催が不透明となり、春の総会での市民展示が主たるミッションである。より魅力的な展示ができるよう、工夫を凝らしたい。各種印刷体なども、改訂の余地を探りたい。
	病事情報ネットワーク管理運営委員会	宇於崎 宏	病事情報ネットワークセンターの安定運用に引き続き取り組んで、日本病理学会会員の皆様や委員会、グループで、症例の呈示を活用してもらえようとする。
	ホームページリニューアルWG	笹島ゆう子	HP改修の最大の目的は「病理医のリクルート強化」であることを基本に改修を行う。また、会員が利用しやすいようなページ、コンテンツ作りを行う。必要に応じて弁理士、弁護士等の専門家に相談しながら委託業者との契約を進め、2026年度中の新HPへの移行を目指す。
金井	教育委員会	金井 弥栄	医学部在学中に病理学を専攻することを決める病理専門医の割合が他の専門医に比べて高いことに鑑み、各大学における学部教育の充実を強力に支援する。特に医師国家試験に良質な病理画像を含む病理学に関する良問の出題を増やすように、厚生労働省医政局医事課・同医師国家試験委員会・日本医学教育学会・医療系大学間共用試験実施評価機構等に働きかけを継続する。学会外からも使用頻度が高い『病理コア画像』を適正に管理し、新規組織写真を追加して継続的に充実を図る。
中黒	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	宮崎 龍彦	令和6、7年度に引き続き病理医・研究医の育成とリクルート委員会を担当する。当委員会の主な業務は6月のレジナビフェアへの出展を通してリクルート活動を行うこと、日本病理学会100周年記念病理学研究新人賞の実施、選考であるが、これらに加えて、各支部から参加いただいている委員から、それぞれの地域における育成とリクルートの現状をとりまとめ、その問題点や改善点を分析し、常任理事会に上申するという役割についてもこの2年間で何らかの改善方法の上申等を行っていただけるよう活動したいと考える。
金井	病理診断講習会委員会	長尾 俊孝	病理診断講習会は、「病理専門医の生涯教育」と「若手病理医の診断力の向上」を目的としている。従来どおり、日本病理学会総会に合わせて「系統的」と「臓器別」の2つに分け、オンデマンド形式で実施する。「系統的」では、特定の臓器や病理診断全般に関わるテーマについての講演を行い、「臓器別」ではWSIを用いた症例ベースの解説形式とする。委員の先生方のご協力を得ながら、魅力的で有益なプログラムを企画したいと考えている。
	海外研修委員会	黒瀬 顕	今年度から海外研修委員に研修経験者を追加した。これにより、広報活動や研修内容および参加者との連絡等のさらなる充実を図ることができる。2026年度研修は応募希望者が6人あったが、Semmelweis大学の意向で4人を選考し、8月9-15日の開催に向けて例年通り準備を進めつつある。また当研修の意義を更に高めるため参加者や当研修に興味をもつ病理医の集まり(OGOB会)を組織し、そちらの活動も充実しつつある。今後はさらに本研修の意義を広め、病理解剖の意義を啓発していきたい。
	生涯教育委員会	相島 慎一	病理学会会員が生涯にわたり病理学に関する知識を広げ、技能を磨くための継続的な学習制度を確立する。これまで構築している組織診断に関するe-learning、病理診断講習会発表ファイルおよび剖検講習会の症例を中心として、今後は細胞診断講習会、分子病理に関するコンテンツを充実させ、病理診断力の質を担保するよう務める。
	胃癌教育助成活動WG	牛久 哲男	全国の病理医が胃癌取扱い規約やWHOブルーブック改定内容を理解し、スムーズに移行できるような講習会としたい。
	診断病理サマーフェスト委員会	矢持 淑子	診断病理サマーフェストは「病理と臨床の対話」という大きな概念のもとで、毎年多くの参加者が得られています。引き続き、ハイブリッドによる安定的な開催とともに、今後の扱うテーマや健全な経営につき、長期的な視野を含め検討を進めていきます。
	ゲノム病理標準化講習会委員会	金井 弥栄	ゲノム病理標準化講習会を開講し、『ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程』を周知して、会員に対して分子病理学解析にかかる基本情報を提供する。日本製薬工業協会等学会外にも受講を呼びかけ、研究基盤整備における病理学の役割を発信する。講習会は日本臨床衛生検査技師会との共催で開催し、タスクシェアによる人材育成の機会とする。
中黒	北海道支部	樋田 京子	第2期目になります。これまでに実施したWEB併用形式も活用して、セミナーを企画・開催する計画です。また9月には病理夏の学校を、10月には学術大会を開催する予定です。支部会の発展と若手病理医の育成に尽力したいと思います。
	東北支部	大森 泰文	年に3回の学術集会と2年に1回の「病理夏の学校」の開催を継続する。事務局サーバーの老朽化に伴い、東北大学のレンタルサーバーに移行することを検討する。支部域内での病理医偏在に伴い、病理診断が逼迫している県が生じている。これらの点を含めて支部内での協議を検討したい。
	関東支部	長尾 俊孝	年4回の学術集会を開催し、病理診断学の最先端の情報を発信するとともに、活発な症例検討により、病理医の生涯教育に寄与していく。近年、全国的に病理診断に関する教育コンテンツが数多く提供されていることを踏まえ、当支部会ならではの特色や利点を生かし、若手病理医の育成や活躍の促進にもつながる、より意義深い学術集会となるよう努める。また、サマーセミナーを通じた人材確保にも積極的に取り組んでいきたい。
	中部支部	宮崎 龍彦	前期に引き続き、中部支部を担当する。例年7月、12月の交見会、3月のスライドセミナーを現地開催で施行すると共に、病理夏の学校をR8年度は対面開催で行う予定である。コロナ禍を挟んで8年ぶりの対面開催となる。1泊2日の開催であるが、これまで合宿形式だったものを、宿泊は各自手配として、世話人および引率側の負担を軽減する形で開催し、新たな開催方法を確立させる試金石とする。R9年度も対面開催を原則としてリクルートに力を入れたい。また、幹事会構成を少し若返りさせ、新たな発想を取り入れ、これまでの暖かい雰囲気の中中部支部をさらに発展させていきたい。
	近畿支部	吉澤 明彦	当支部会では、年4回の学術集会と病理医リクルートのための夏の学校を主催している。学術集会では症例検討と診断講習会が二本立てとなっているが、症例発表は減少傾向で、また日本病理学会も多くの診断講習会を開催しており内容につき検討が必要になっている。会員交流を念頭におりよりよい支部会のあり方を模索していく予定である。
	中国・四国支部	増本 純也	中国・四国支部は日本海と瀬戸内海と太平洋にまたがる地域を抱えるため、支部学術集会に全会員が参集することは困難です。それでも会員の知識を更新し、日々の診断業務に役立つ教育セミナーを充実させ、学術総会では学術交流を推進し、会員相互の共同研究の機会を提供することは重要な課題です。そこでハイブリッド環境を一般化したいと思います。また、夏の学校では学生や初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えたいと思います。
	九州・沖縄支部	久岡 正典	当支部における主たる学術活動として「九州・沖縄スライドコンファレンス」を対面あるいはWEBで年6回開催すると共に、それらに合わせて剖検例を対象とする病理集談会(1回)と教育講演・教育セミナー(2回)を企画し実行し、会員の生涯教育や交流に役立てる。秋の病理学校を毎年開催し、九州沖縄地区の病理医のリクルート活動に尽力する。
小田	監事	伴 慎一	客観性、堅実性、公平性を旨として監事の任務に当たることで、学会の運営に多少とも貢献したい所存です。よろしく願い申し上げます。
	監事	谷本 昭英	小田義直理事長のもと、伴慎一先生とともに、監事の立場から日本病理学会のさらなる発展に貢献いたしたく、宜しく願いいたします。